

10) 第3節 次代を育む文化・教育環境の創造

目的:多くの市民が暮らしたいと思う文化や教育環境がある

指標:文化・教育に魅力を感じて、いつまでも住み続けたいと思う人の割合

① 目的

このまちにいつまでも住みつづけたい、住んでいて良かったと市民が感じ、喜びや生きがいとともに、ふるさととして愛着が感じられるまちにするためには、教育と文化も大きな役割を担っています。

② 指標

松戸市の文化・教育環境の整備方針や施策の評価は、本市の定住志向に関する市民意識調査において、文化・教育の環境整備を理由に住み続けたいという市民の割合としてとらえることが的確です。今後、この評価を高めて行くことを目指します。

③ 設問

この指標は、「文化・教育環境の4項目の満足度」を組み合わせ聞いている。「社会・態度（評価）」

「子どもの教育環境」「文化・芸術の鑑賞や活動環境」「スポーツや健康づくりのための環境」「史跡や神社など歴史・伝統文化遺産」の4項目

あなたが松戸市で生活する中で、次のことについてそれぞれの程度満足していますか。(1つに○)

- 1 十分満足している 2 まあまあ満足している 3 普通である 4 やや不満である
5 きわめて不満である 6 わからない

④ 指標の現状（値）

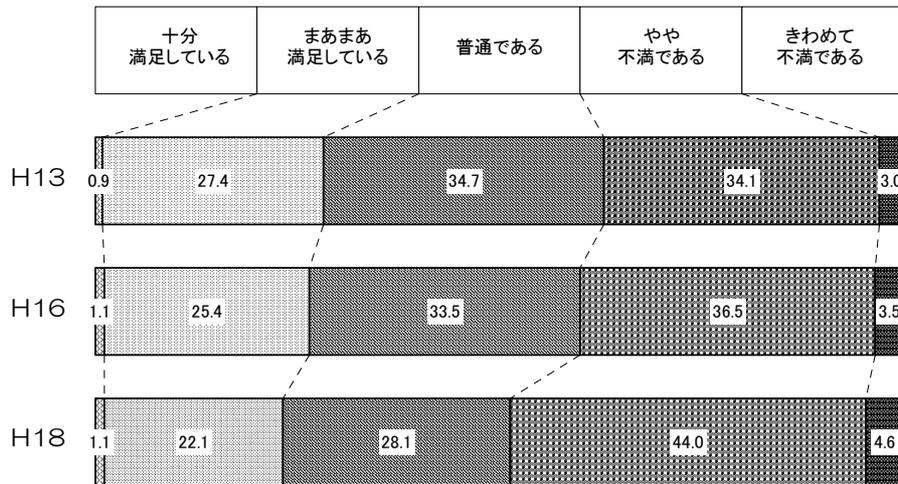
カテゴリー	H13年度	H16年度	H18年度	H19年度(目標値)
十分満足しており、住み続けたい	0.7%	1.1%	1.1%	
まあまあ満足しており、住み続けたい	20.6%	20.1%	16.4%	
計	21.3%	21.2%	17.5%	25.0%

(注)「十分満足しており、住み続けたい」は文化・教育環境4項目の総合満足度が「十分満足している」に該当し、定住意向で“住み続けたい”と回答している人の割合である。同様に「まあまあ満足しており、住み続けたい」も文化・教育環境の総合満足度が「まあまあ満足している」に該当し、定住意向で“住み続けたい”と回答している人の割合である。

⑤ 指標の分析

◆ 文化・教育環境にまあまあ満足しており、住みたい人の割合が減少

文化・教育環境の4項目についての総合満足度は、“やや不満である”人が最も多く、前回より10ポイント近く増え、“まあまあ満足”がやや減少する結果となった。定住意向においても“住みたい”とする人が減少したため、指標値は前回より3.7ポイント減少し、平成19年度目標値を7.5ポイント下回る結果となっている。



注) 文化・教育環境の4項目の総合満足度については、次のような方法にもとづき算出している。

- ・ Q17 エ、オ、カ、セの4つの質問の選択肢に表1の評価点をそれぞれ与える。
- ・ 4つの質問の評価点の合計点を表2にしたがい分布をとる。

表1

①「十分満足」	+2
②「まあまあ満足」	+1
③「普通」	0
④「やや不満」	-1
⑤「きわめて不満」	-2

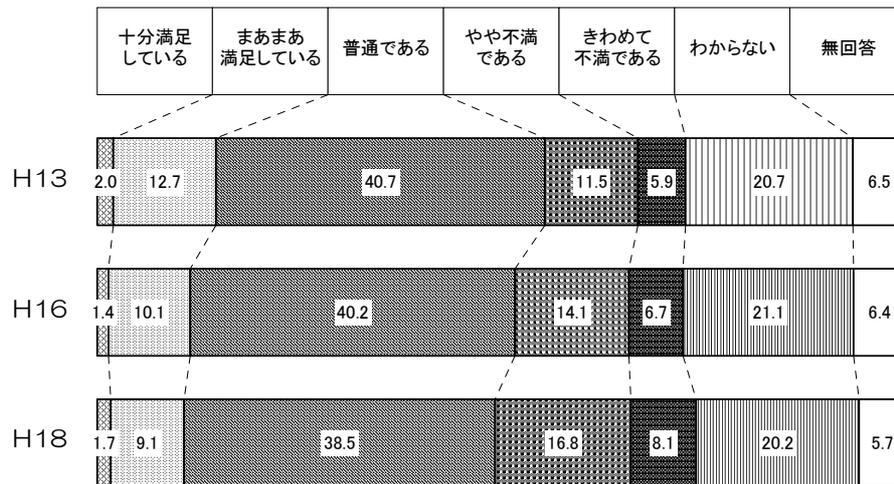
表2

① 5点以上 (十分満足している)
② 1~4点 (まあまあ満足している)
③ 0点 (普通である)
④ -1~-4点 (やや不満である)
⑤ -5点以下 (きわめて不満である)

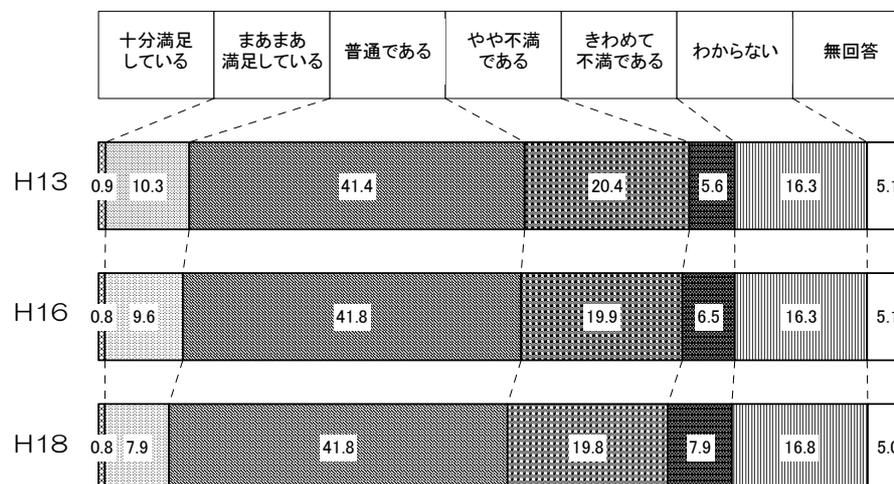
教育・文化環境の個別項目の満足度をみると、全ての項目で“十分満足している”と“まあまあ満足している”の合計が2割を下回っており、全体的に“普通である”との回答が4～5割を占めている。

子どもの教育、文化・芸術の鑑賞や活動環境、スポーツや健康づくりのための環境の3項目については、“十分満足している”と“まあまあ満足している”の合計を“やや不満である”と“きわめて不満である”の合計が上回っており、不満を感じている人が多くなっている。

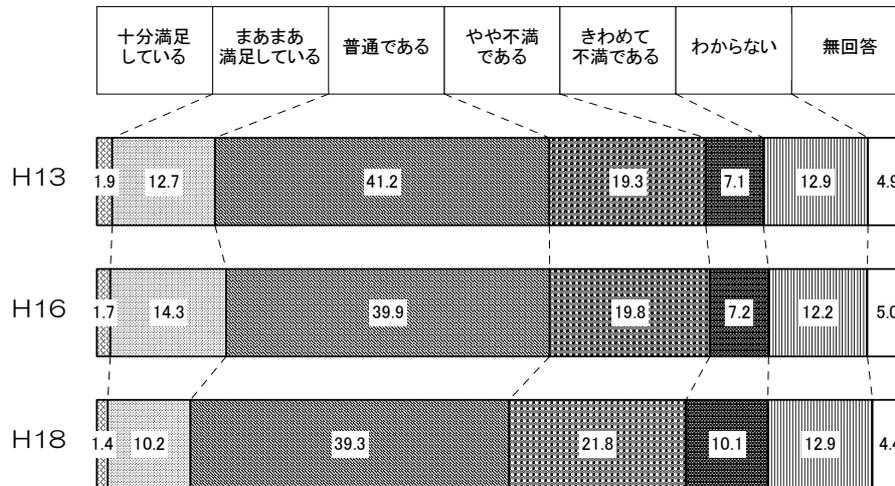
【子どもの教育環境】



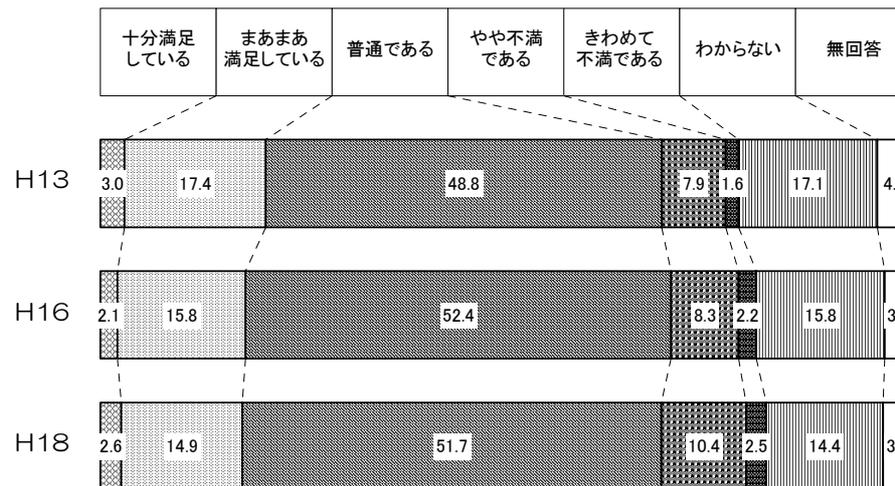
【文化・芸術の鑑賞や活動環境】



【スポーツや健康づくりのための環境】



【史跡や神社仏閣など歴史・伝統文化遺産】



11) 第3節 次代を育む文化・教育環境の創造 第1項 生涯学習の推進

目的:より多くの人々が積極的に学習活動を行い、その成果を活かすようになる

指標:学習活動を行っている人の割合

① 目的

学習は、その体験を成果として何らかの形で活かすことにより、学んだ事柄が自分の中に定着し、さらに次の学習に進んでいくという構造を持っています。このことは、学習者の主体的な学習と、地域の中での多様な学習活動による学び合う関係を育てていきます。また、本市の生涯学習に関する市民意識調査においては、学習活動と地域活動との間に相関関係が認められました。

これらのことは、学習活動が地域社会での活動へと発展し、地域づくりの重要な要素となることを示唆しています。

② 指標

地域づくりの基盤となる生涯学習社会の実現に向けて、学習活動に取り組む市民が多くなることを目指します。

③ 設問

この指標は、次の設問により期間を限定して直接的に聞いている。「個人・行動」

あなたは日頃、特定の関心があるテーマについて、自主的に学習活動をしていることがありますか。過去1年間に振り返って、学習活動に取り組んだ日数は平均するとどのくらいですか。(1つに〇)

- 1 ほぼ毎日 2 週に数日ほど 3 月に数日ほど
4 年に数日ほど 5 全くない

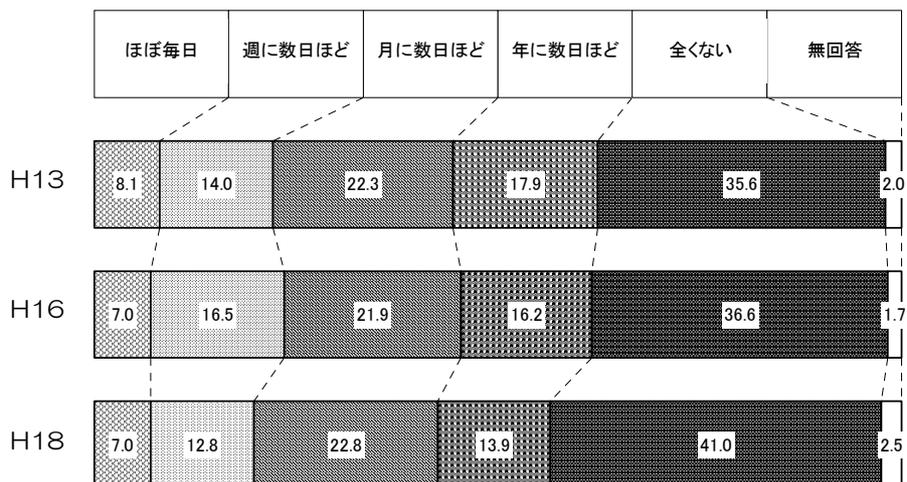
④ 指標の現状

カテゴリー	H13年度	H16年度	H18年度	H19年度(目標値)
ほぼ毎日	8.1%	7.0%	7.0%	
週に数日ほど	14.0%	16.5%	12.8%	
月に数日ほど	22.3%	21.9%	22.8%	
計	44.4%	45.4%	42.6%	50.0%

⑤ 指標の分析

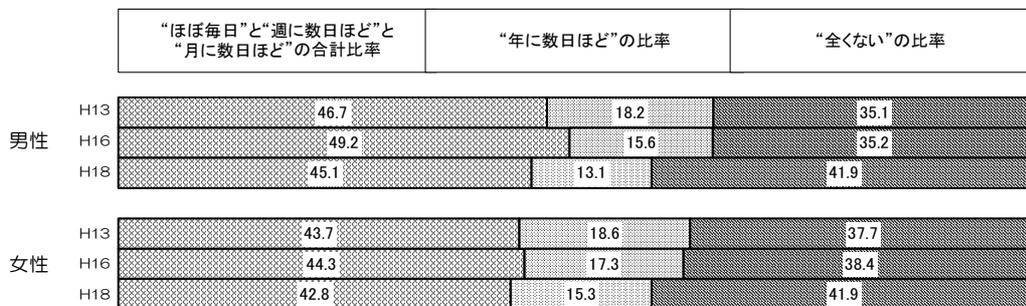
◆ 学習活動に取り組む人は、全体の4割を占める

過去一年間に“月に数日以上”学習活動に取り組んでいる人はやや減少し、平成 19 年度目標値を 7.4 ポイント下回る結果となっている。一方、“全くない”が 5 ポイント弱増加し4割を超えており、“月に数日以上”“月に数日以上”学習活動に取り組んでいる人とはほぼ同程度となっている。



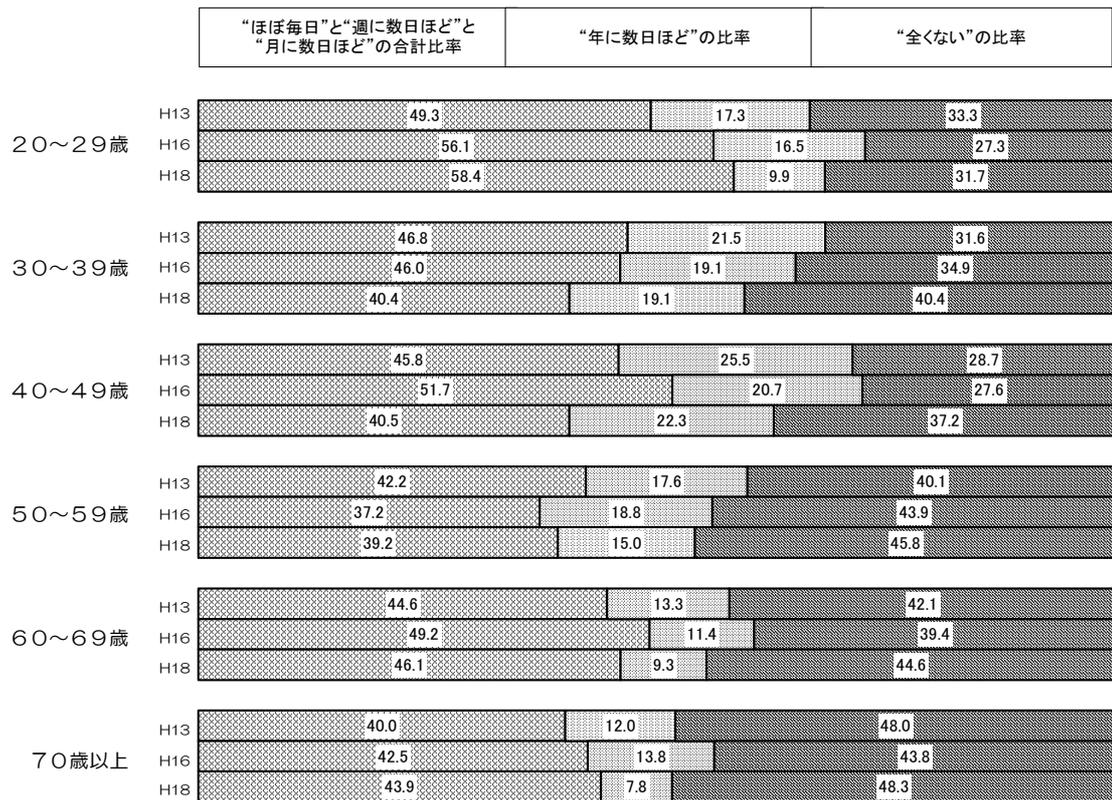
性別で見ると、定期的に学習活動を行っている人は女性に比べ男性にやや多く、前回と同様の傾向となっている。

【性別学習活動】



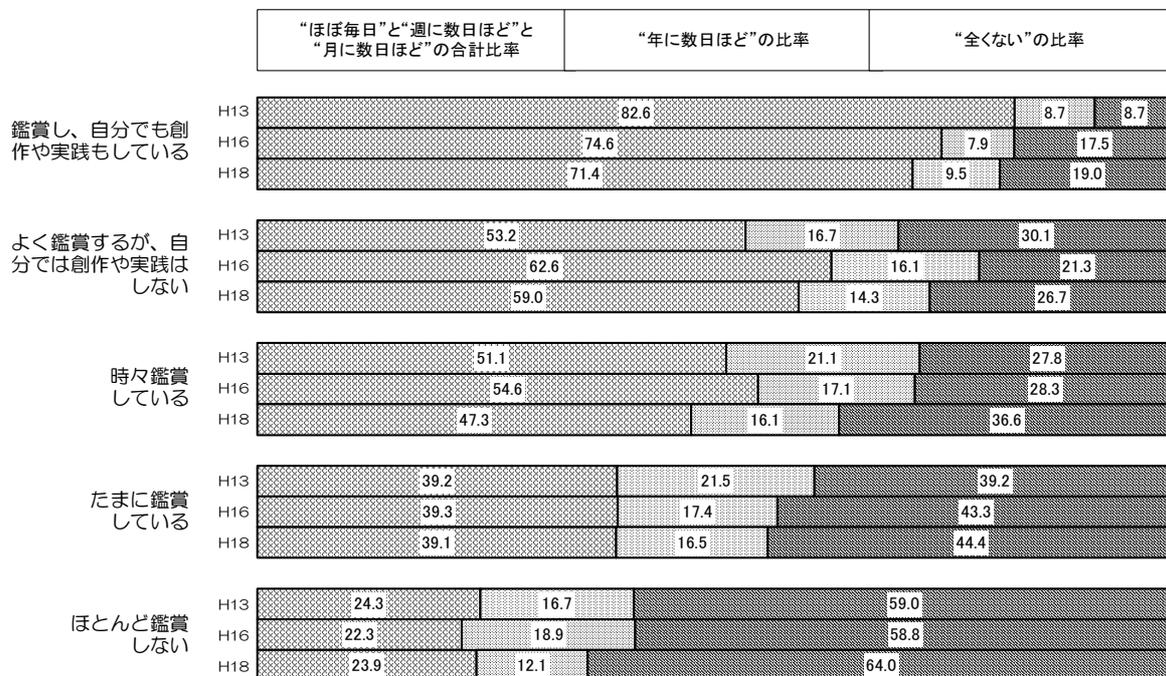
年齢別にみると、20歳代で定期的に学習活動を行っている人の割合が6割近くになっている。その他の年齢層では4割前後となっている。また、40歳代においては、学習活動をしている人の割合が10ポイント強減少し、“全くない”とする人は、10ポイント程度増加している。一方、“全くない”とする人は年齢層とともに増加しており、50歳代、60歳代、70歳以上では半数近くとなっている。

【年齢別学習活動】



芸術文化活動との関係を見ると、芸術文化活動を行っている人の方が学習活動も定期的に行っている割合が高い傾向にあり、鑑賞し、自分でも創作や実践もしている人では7割を超えている。

【芸術文化の実施状況別学習活動】



12) 第3節 次代を育む文化・教育環境の創造 第1項 生涯学習の推進

目的:より多くの人々が積極的に学習活動を行い、その成果を活かすようになる

指標:学習活動の成果を地域社会で活かしている人の割合

① 目的

学習は、その体験を成果として何らかの形で活かすことにより、学んだ事柄が自分の中に定着し、さらに次の学習に進んでいくという構造を持っています。このことは、学習者の主体的な学習と、地域の中での多様な学習活動による学び合う関係を育てていきます。また、本市の生涯学習に関する市民意識調査においては、学習活動と地域活動との間に相関関係が認められました。

これらのことは、学習活動が地域社会での活動へと発展し、地域づくりの重要な要素となることを示唆しています。

② 指標

地域づくりの基盤となる生涯学習社会の実現に向けて、取り組んだ学習活動を活かす市民が多くなることを目指します。

③ 設問

この指標は、次の設問により直接的に聞いている。「個人・態度（認知）」

あなたがこれまでに、自主的に取り組んだ学習活動の成果が活かされていると思いますか。（全てに○）

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 1 仕事、職業に活かされている | 2 自分自身の向上に活かされている |
| 3 家庭や家族に活かされている | 4 地域活動や社会活動に活かされている |
| 5 親睦を深めたり、友人を得るときに活かされている | |
| 6 その他（ ） | |
| 7 活かされていない | |

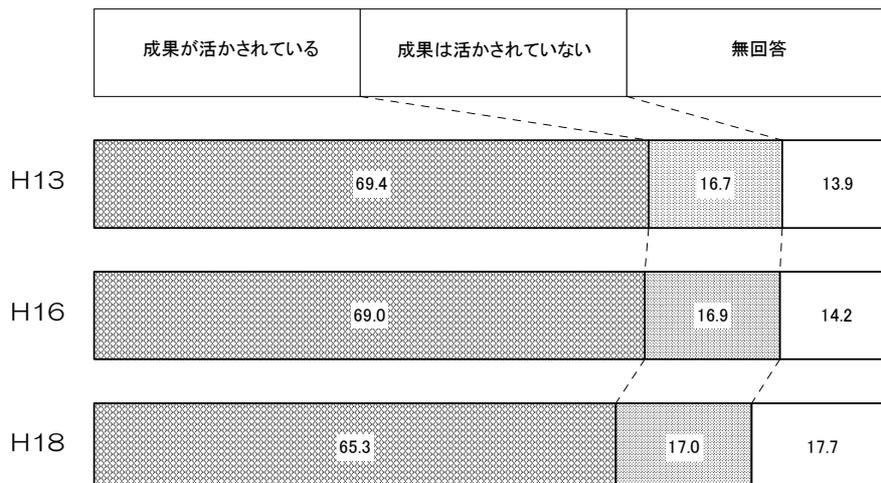
④ 指標の現状（値）

カテゴリー	H13年度	H16年度	H18年度	H19年度（目標値）
成果が活かされている	69.4%	69.0%	65.3%	75.0%

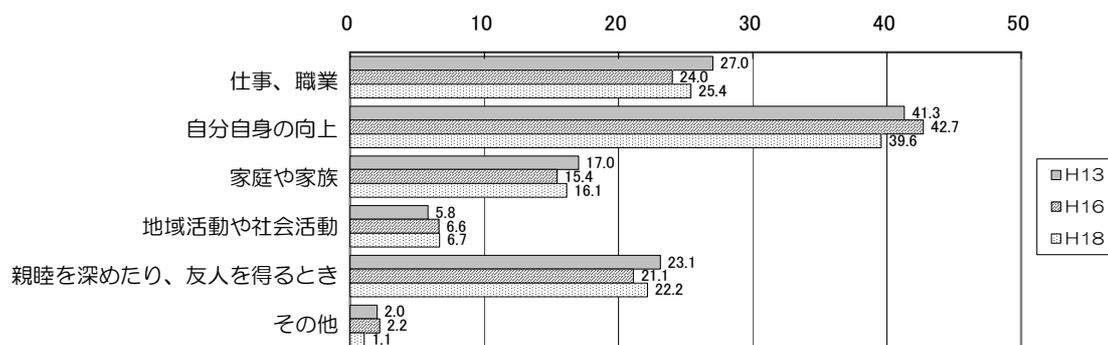
⑤ 指標の分析

◆ 学習活動の成果を活かす人の割合は僅かに減少

これまでに、自主的に取り組んだ学習活動の成果を、何らかの形・方面で活かしていると考える人の割合は、前回に比べ僅かに減少し、平成19年度目標値にはまだ9.7ポイントの開きがある。

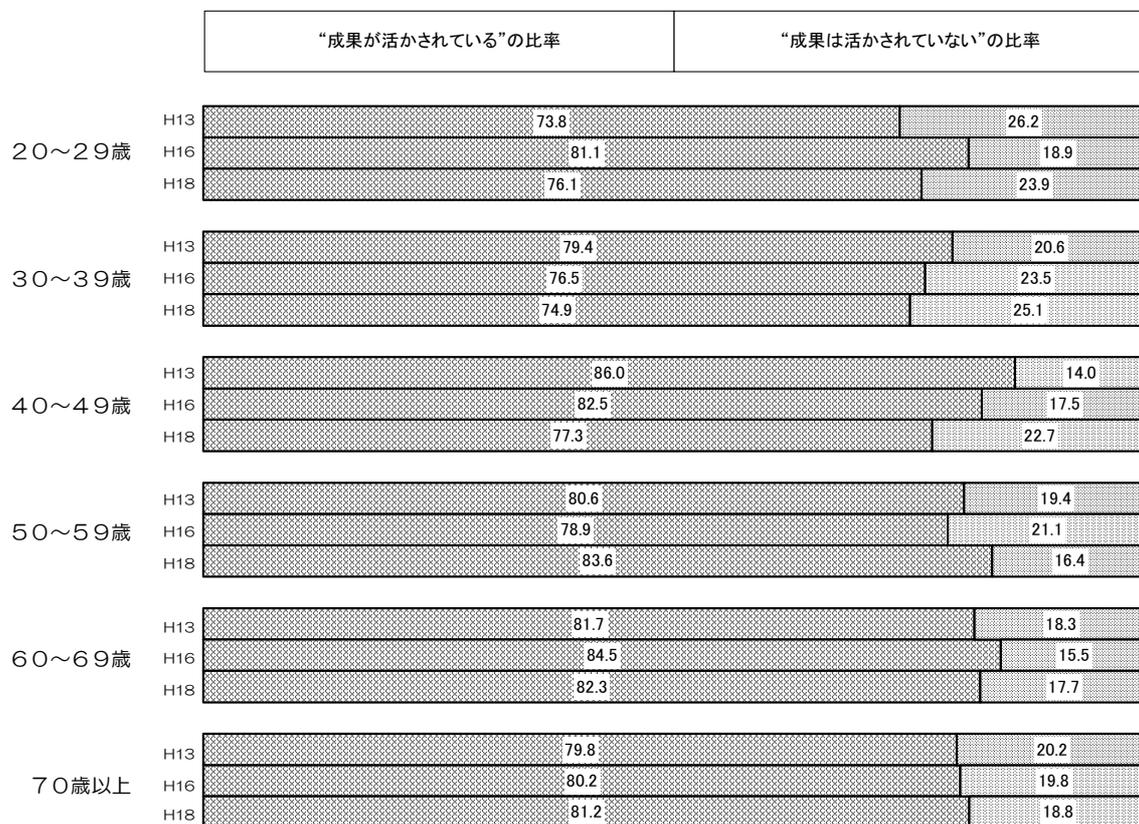


成果を活かしている対象は、前回と同様、“自分自身の向上”が最も多くあがっており4割弱となっている。次いで“仕事、職業”、“親睦を深めたり、友人を得るとき”が2割強で続いている。



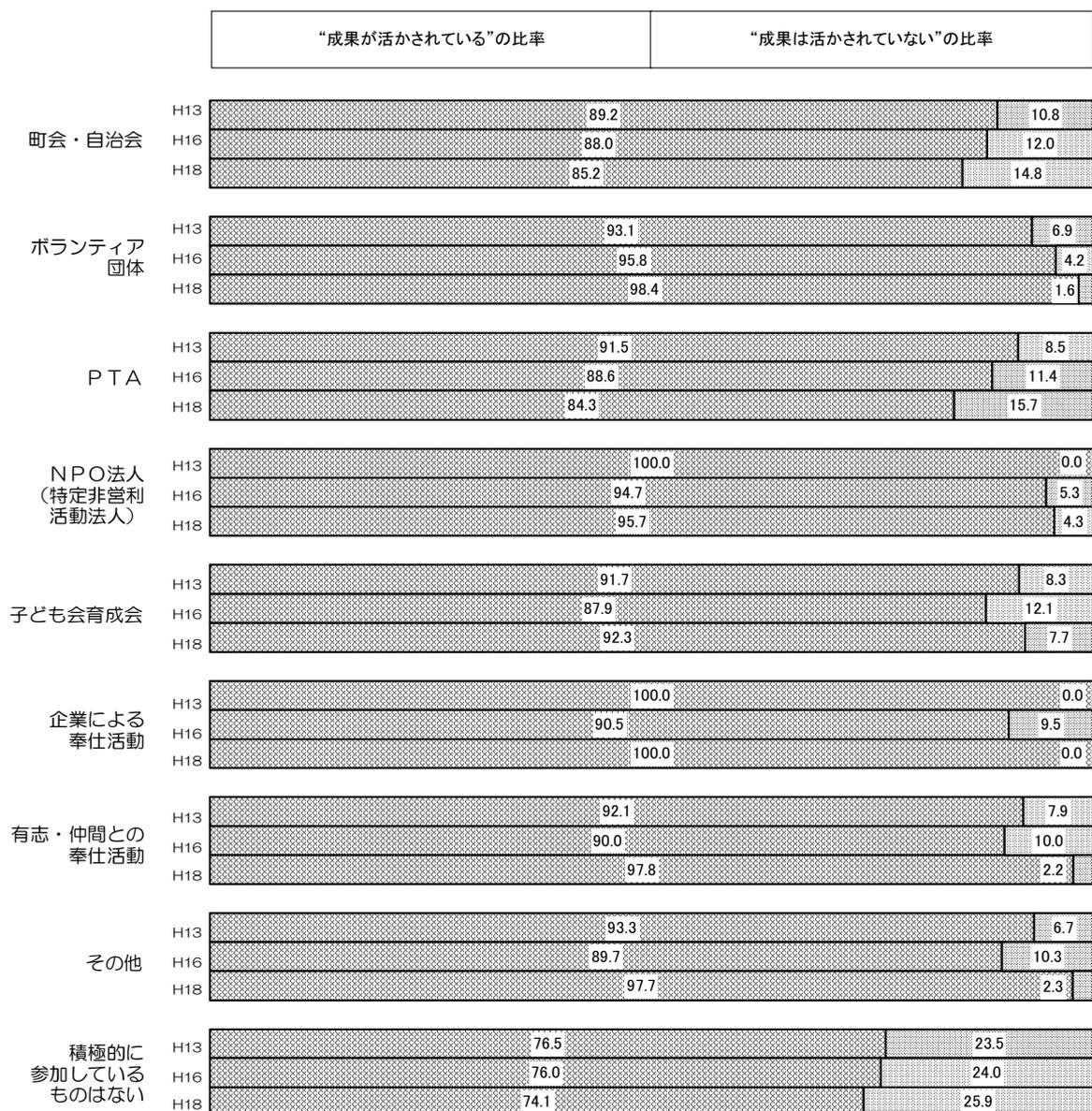
年齢別にみると、いずれの年代でも活かされていると考える人が多いものの、年齢層が上がるにつれ、僅かながら増加している傾向にある。

【年齢別学習活動の成果】



また、地域活動への参加との関係を見ると、何らかの地域活動に参加している人の方が、学習成果が活かされていると感じる割合がより高まる傾向にある。

【地域活動への参加別学習活動の成果】



13) 第3節 次代を育む文化・教育環境の創造

第3項 生涯にわたるスポーツ活動の支援

目的:より多くの人々がスポーツに親しむようになる

指標:スポーツを行っている人の割合

① 目的

人生をより豊かにし、身体・精神の両面に良好な作用をするスポーツは、ストレスの多い現代社会において、心身の健全な発達や活力に満ちた社会を形成していく上で必要です。市民それぞれのライフステージに合ったスポーツを親しむことが重要であると考えます。

② 指標

スポーツを行っている市民の割合を測ることでスポーツの振興度合を把握し、スポーツに親しむ市民の増加を目指します。

③ 設問

この指標は、次の設問により直接的に聞いている。「個人・行動」

あなたは日頃、運動・スポーツをしていますか。(1つに○)

- | | |
|---------------------|----------------|
| 1 現在も継続的にしている | 2 最近、始めた |
| 3 以前はしていたが、現在はしていない | 4 以前も、現在もしていない |

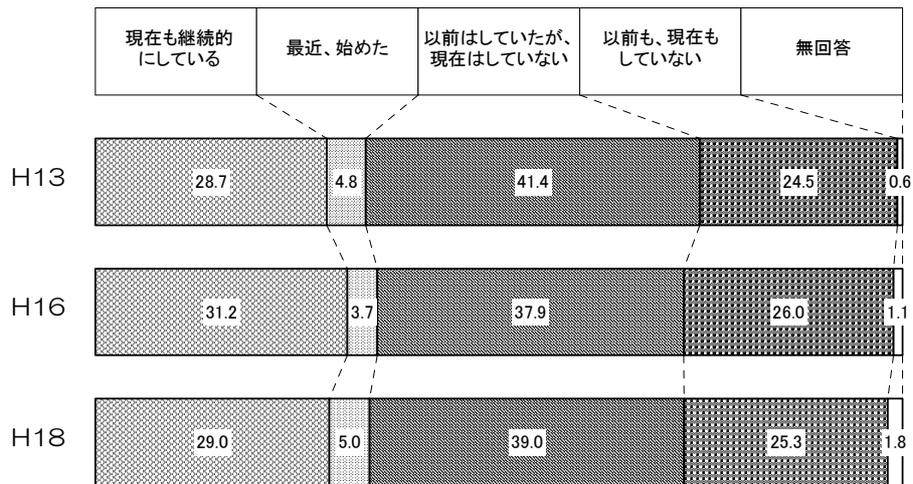
④ 指標の現状(値)

カテゴリー	H13年度	H16年度	H18年度	H19年度(目標値)
現在も継続的にしている	28.7%	31.2%	29.0%	
最近、始めた	4.8%	3.7%	5.0%	
計	33.4%	34.9%	34.0%	50.0%

⑤ 指標の分析

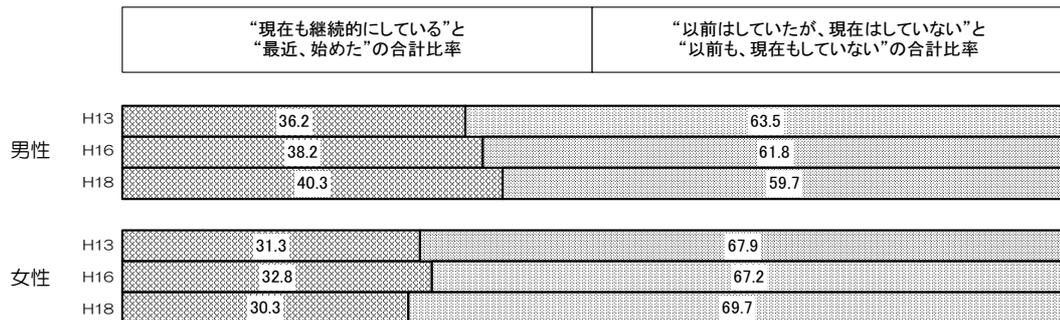
◆ 日頃スポーツをしている人の割合はほぼ横ばい

日ごろ、運動・スポーツをしている人は、前回に比べほぼ横ばいとなっており、平成19年度目標値にはまだ16.0ポイントの開きがある。内訳をみると、“現在も継続的にしている”人が僅かに減少した一方、“以前はしていたが、現在はしていない”とする人は僅かに増加しており、これまで継続していた人の減少がうかがえ、今後の目標到達にあたっての懸念要因とも捉えられる。



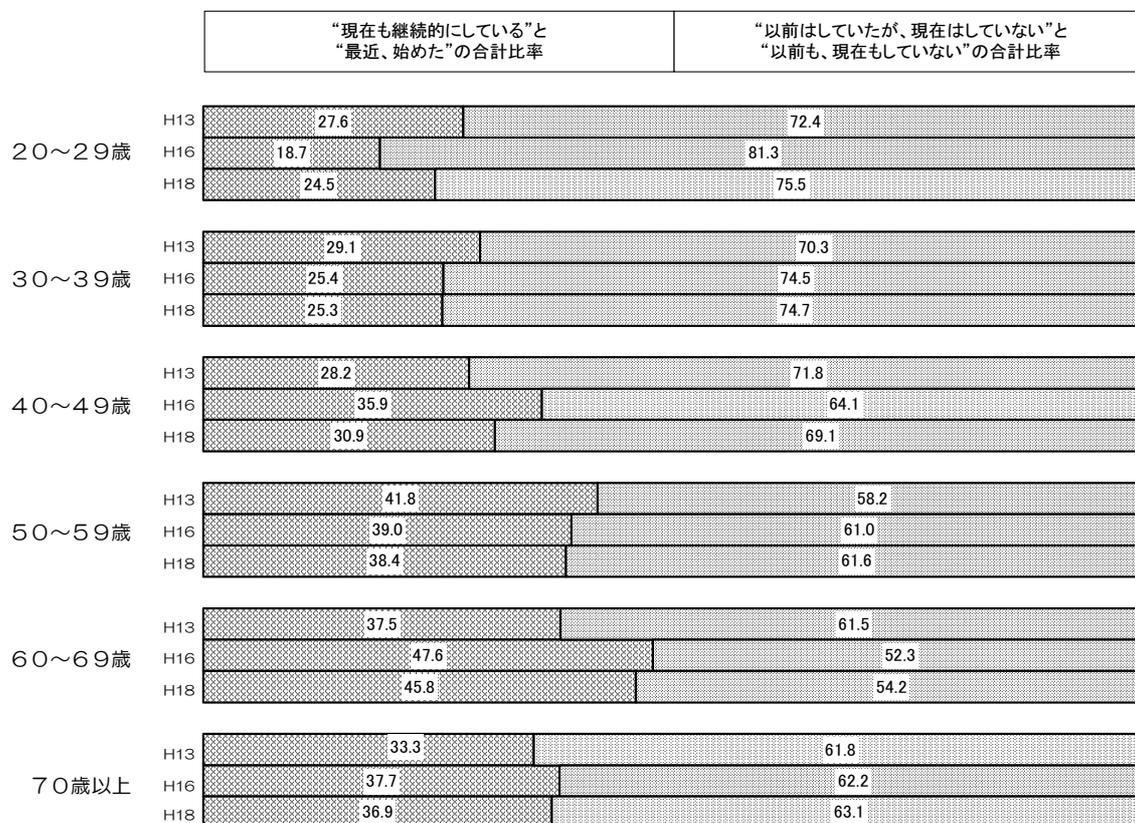
性別で見ると、前回と同様、男性の方がスポーツ活動を行っている人が多なっている。

【性別スポーツ活動】



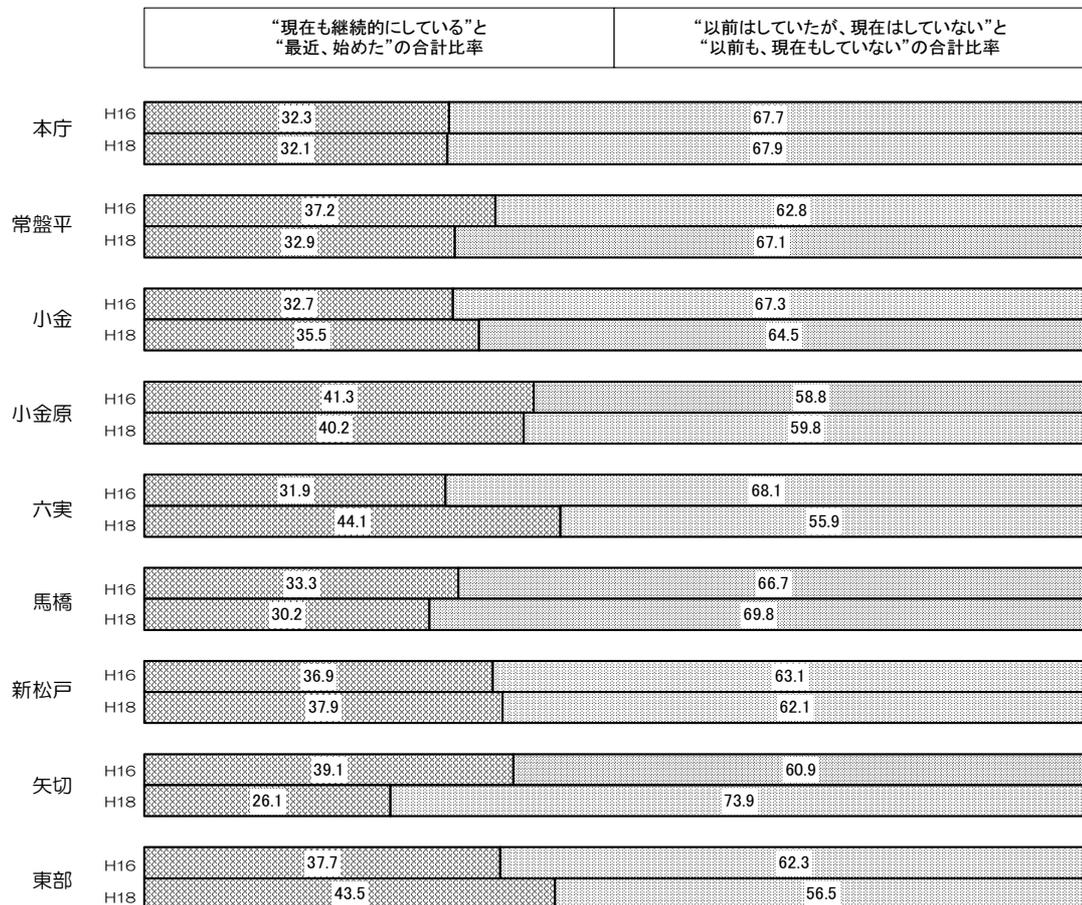
年齢別にみると、おおむね年齢層が上がるにつれ、スポーツ活動を行っている人の割合も高まる傾向にある。

【年齢別スポーツ活動】



地区別でみると、スポーツ活動を行っている人が多いのは、六実、東部、小金原地区で4割を超えている。一方、スポーツ活動を行っている人が少ない地区は、矢切地区で26.1%となっている。

【地区別スポーツ活動】



14) 第3節 次代を育む文化・教育環境の創造

第4項 国際化の推進と平和意識の高揚

目的:外国籍市民が暮らしやすくなる

指標:外国籍市民と交流している人の割合

① 目的

国際化の時代にあって市民一人ひとりが、多種多様な民族的、文化的アイデンティティを尊重し、人に優しい生活システムを構築していくことにより、外国籍市民が暮らしやすくなるまちづくりの実現が必要であると考えます。

② 指標

外国籍市民と交流する人達が増えることにより、日常生活の中で様々な不安やトラブルが減少するようになることを目指します。

③ 設問

この指標は、次の設問により直接的に聞いている。「個人・行動」

あなたは日頃、松戸市に在住したり、滞在したりしている外国の方達と親しく接することがどのくらいありますか。(1つに○)

- 1 大変よくある 2 しばしばある 3 ときどきある 4 あまりない
5 ほとんどない

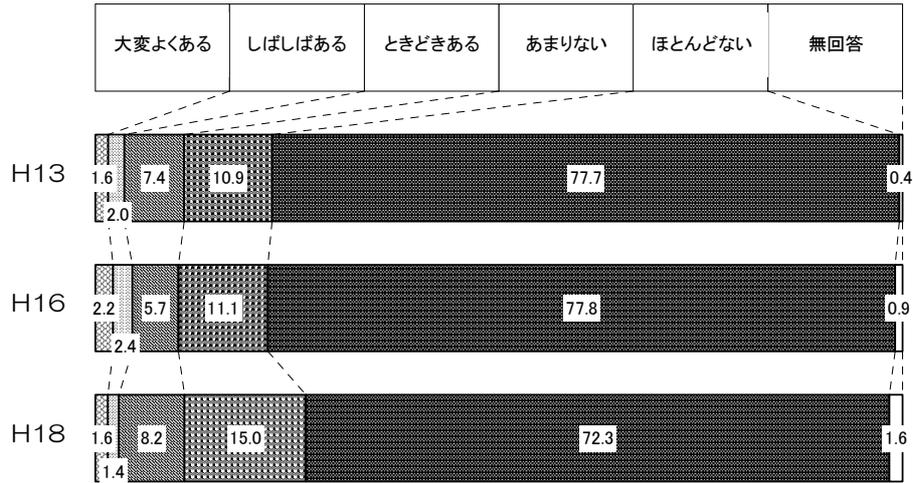
④ 指標の現状(値)

カテゴリー	H13年度	H16年度	H18年度	H19年度(目標値)
大変よくある	1.6%	2.2%	1.6%	
しばしばある	2.0%	2.4%	1.4%	
計	3.6%	4.5%	2.9%	7.0%

⑤ 指標の分析

◆ 外国籍市民との交流は減少

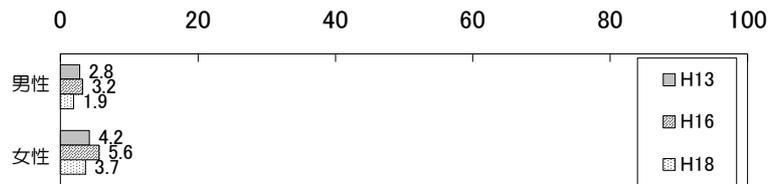
外国籍市民との交流が一定程度ある人は前回に比べ減少しており、平成19年度目標値を4.1ポイント下回っている。ただ、“ときどきある”は僅かに増加しており、外国籍市民との交流が“ほとんどない”人は減少している。



性別でみると、大きな差はみられないものの、女性の方がやや交流する人が多くなっている。

【性別外国籍市民との交流】

〔“大変よくある”と“しばしばある”の合計比率〕

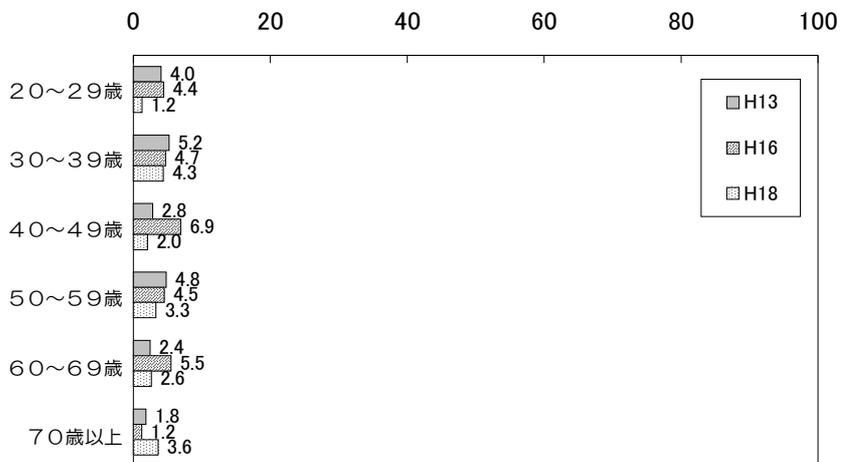


平成 18 年度	n 数	“大変よくある”と“しばしばある”の合計比率	“ときどきある”の比率	“あまりない”の比率	“ほとんどない”の比率
全体	1581	3.0	8.3	15.2	73.5
男性	671	1.9	6.6	14.0	77.5
女性	899	3.7	9.7	16.0	70.6

年齢別にみると、交流している人の割合が高い年齢層はみられない。

【年齢別外国籍市民との交流】

〔“大変よくある”と“しばしばある”の合計比率〕



平成 18 年度	n 数	“大変よくある”と“しばしばある”の合計比率	“ときどきある”の比率	“あまりない”の比率	“ほとんどない”の比率
全体	1575	3.0	8.3	15.2	73.5
20～29 歳	163	1.2	6.1	19.0	73.6
30～39 歳	322	4.3	8.4	16.8	70.5
40～49 歳	246	2.0	9.8	19.5	68.7
50～59 歳	305	3.3	8.9	14.4	73.4
60～69 歳	346	2.6	8.7	11.3	77.5
70 歳以上	193	3.6	6.7	11.9	77.7

15) 第3節 次代を育む文化・教育環境の創造

第4項 国際化の推進と平和意識の高揚

目的:すべての人が世界平和を望むようになる

指標:国際紛争に対する関心を示す人の割合

① 目的

世界の人々、これから生まれてくる子どもたちに再び戦争等の悲惨さを繰り返さないために、世界唯一の被爆国として、平和の重みを感じ、平和を愛し、平和の大切さを深めて、何よりも尊い恒久平和に対する意識を高めることが重要と考えます。

② 指標

国内においては、平和な状態が維持されているが、国家間の紛争や軍備の拡張、テロの台頭による緊張の高まりは、当事国だけの問題でなく様々な形で他国の平和を脅かしているため、世界にも目を向けた市民の平和に対する意識の高揚を図ることを目指します。

③ 設問

この指標は、次の設問により単なる興味関心ではなく、解決という意識を聞いている。「社会・態度(関心)」

あなたは、現在世界のあちこちで起こっている国際紛争の解決について特に関心をお持ちですか。(1つに○)

- 1 大変関心を持っている 2 かなり関心を持っている
3 ある程度関心を持っている 4 あまり関心を持っていない 5 ほとんど関心がない

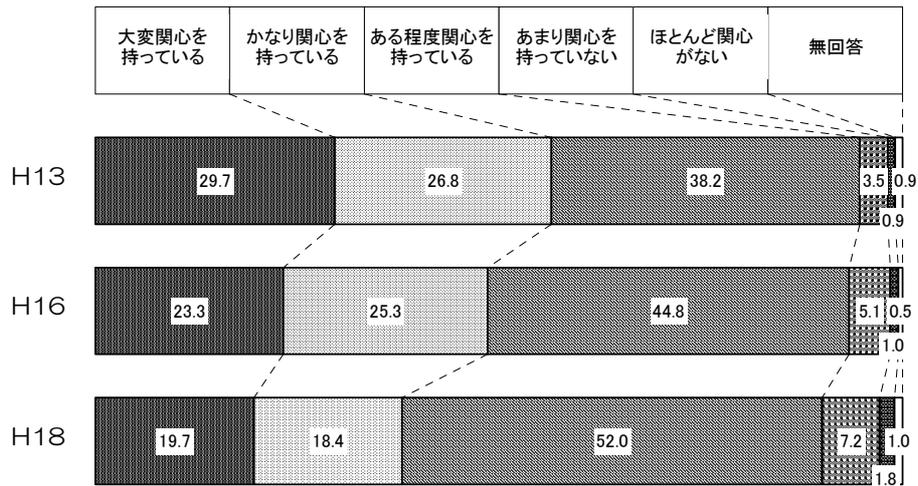
④ 指標の現状(値)

カテゴリー	H13年度	H16年度	H18年度	H19年度(目標値)
大変関心を持っている	29.7%	23.3%	19.7%	
かなり関心を持っている	26.8%	25.3%	18.4%	
計	56.5%	48.6%	38.0%	56.5%

⑤ 指標の分析

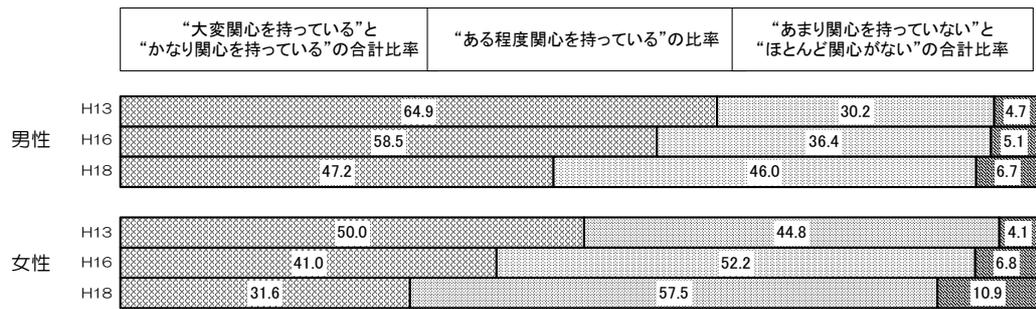
◆ 国際紛争の解決に対する関心は大幅に減少、日常的な関心事項に移行した可能性も

国際紛争の解決について、強い関心を持つ人の割合は、前回に比べ大幅に減少し、平成19年度目標値には18.5ポイントの隔たりがある。しかし、“ある程度関心を持っている”とする人は半数を超えており、国際情勢に対する関心が日常的なものとして、他の様々な関心事項と同じレベルに扱われているとも考えられる。



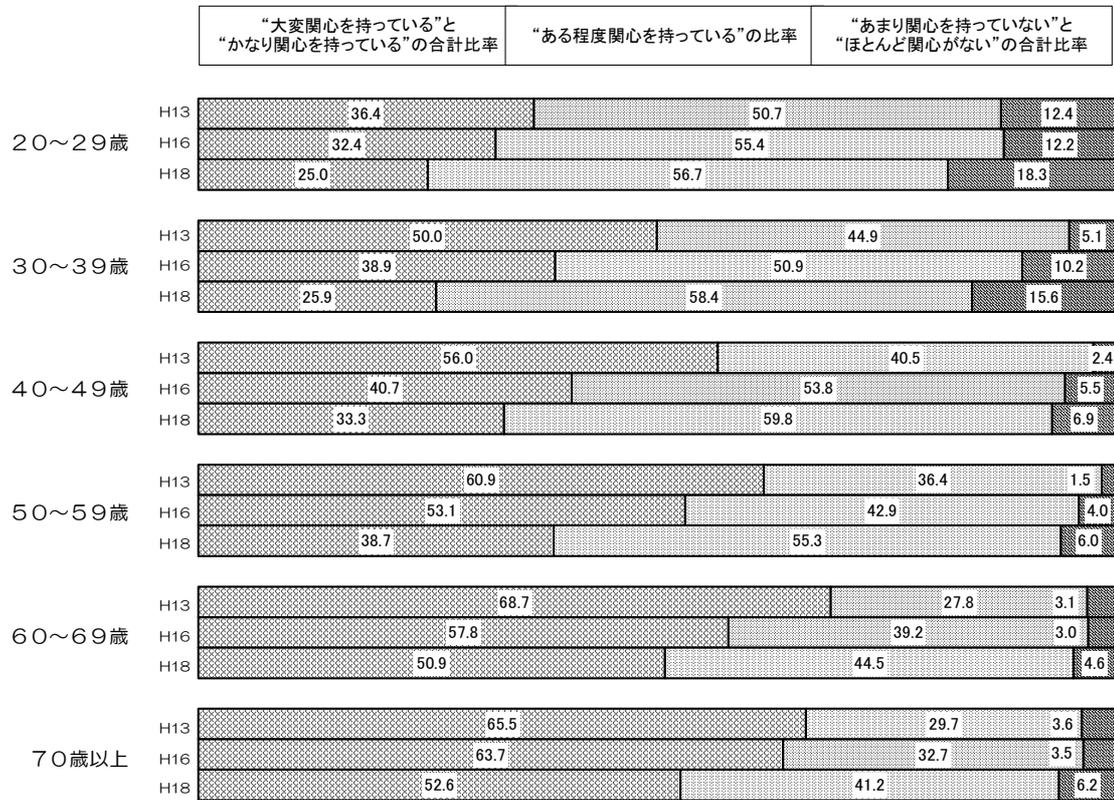
性別でみると、女性に比べ男性の方がより高い関心を持つ傾向にあるが、性別に関わりなく減少傾向にある。

【性別国際紛争】



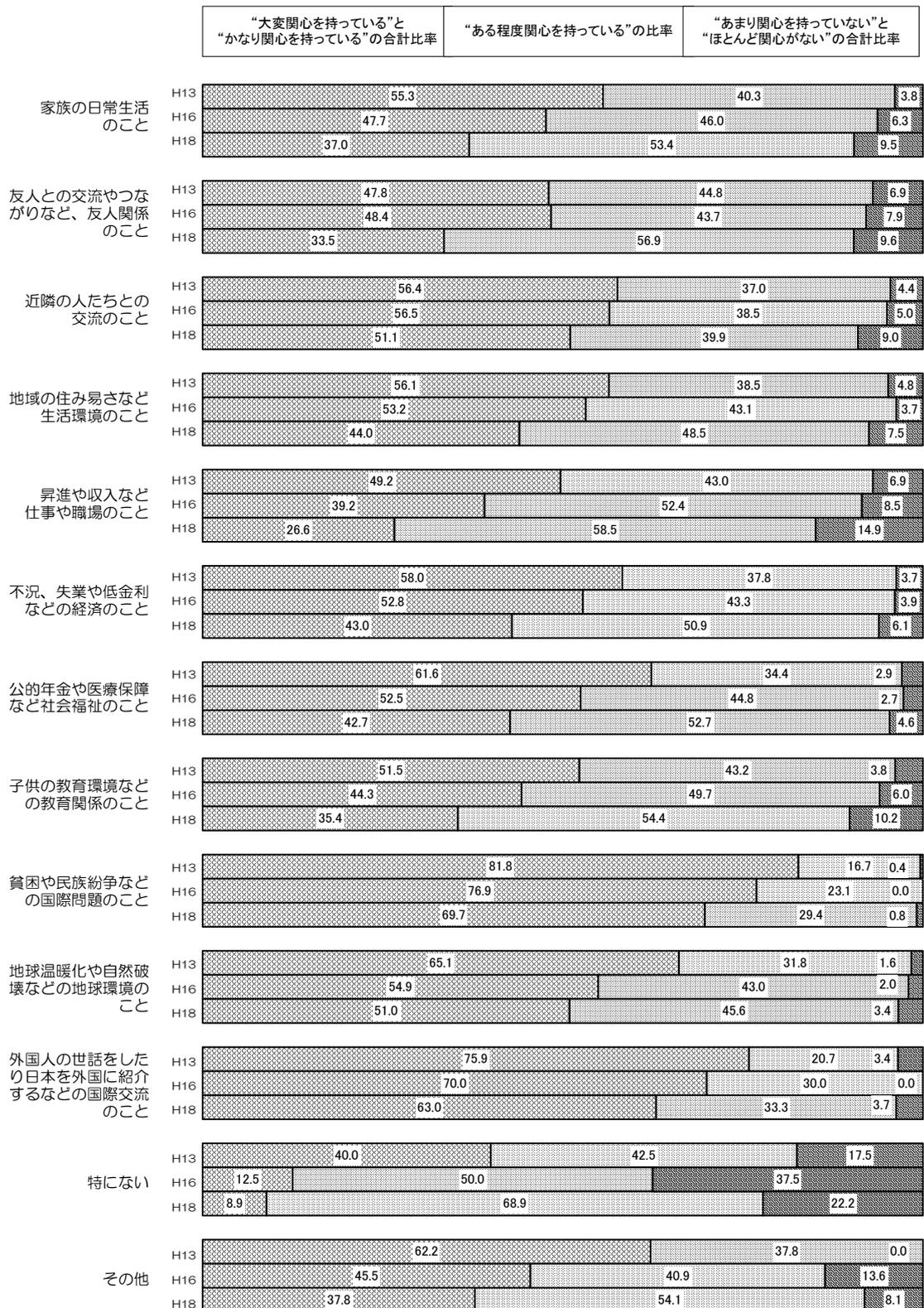
年齢別にみると、年齢層が上がるにつれ、関心が高まる傾向が、前回と同様みられるが、割合自体は年齢に関わりなく減少傾向にある。

【年齢別国際紛争】



日常的な興味や関心との関係をみると、国際問題や国際交流などに興味や関心を持つ人が国際紛争の解決にも高い関心を持っているが、その他の関心事項との差が減少しており、特別な問題ではなくなっているとも考えられる。

【興味や関心別国際紛争】



16) 第3節 次代を育む文化・教育環境の創造

第6項 多様な文化・芸術の創造

目的:より多くの人々が文化・芸術に親しみ、自ら創造的な活動をするようになる

指標:文化・芸術に親しむ人の割合

① 目的

市民が自分の住むまちに愛着を感じ、郷土として誇りを持ち続けるには、文化的なアイデンティティーが大きな要素となります。市民自らが文化の担い手となり、独自の文化を創出していくことが求められており、わがまち「まつど」の文化芸術活動を促進し、市民はもとより市外の人にとっても魅力のあるまち「まつど」をつくり上げることが重要と考えます。

② 指標

市民が親しんだり活動したりしている文化や芸術には様々なものがありますが、市民の自主的活動や自ら創造的な活動をする市民が増えていくことを目指します。そこで文化・芸術に親しむ市民の割合を指標として測ります。

③ 設問

この指標は、次の設問により創作や実践と鑑賞を区分して直接的に聞いている。「個人・行動」

あなたは日頃、絵画、音楽、映像、演劇などの芸術文化を鑑賞したり、創作や実践することがありますか。(1つに○)

- | | |
|-------------------------|-------------|
| 1 鑑賞し、自分でも創作や実践もしている | 3 時々鑑賞している |
| 2 よく鑑賞するが、自分では創作や実践はしない | 5 ほとんど鑑賞しない |
| 4 たまに鑑賞している | |

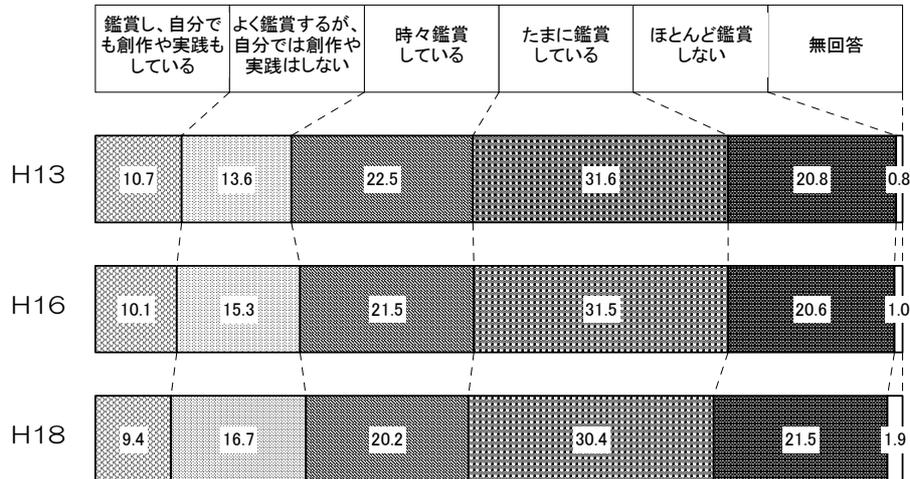
④ 指標の現状(値)

カテゴリー	H13年度	H16年度	H18年度	H19年度(目標値)
鑑賞し、自分でも創作や実践もしている	10.7%	10.1%	9.4%	
よく鑑賞するが、自分では創作や実践はしない	13.6%	15.3%	16.7%	
時々鑑賞している	22.5%	21.5%	20.2%	
計	46.8%	46.9%	46.2%	50.0%

⑤ 指標の分析

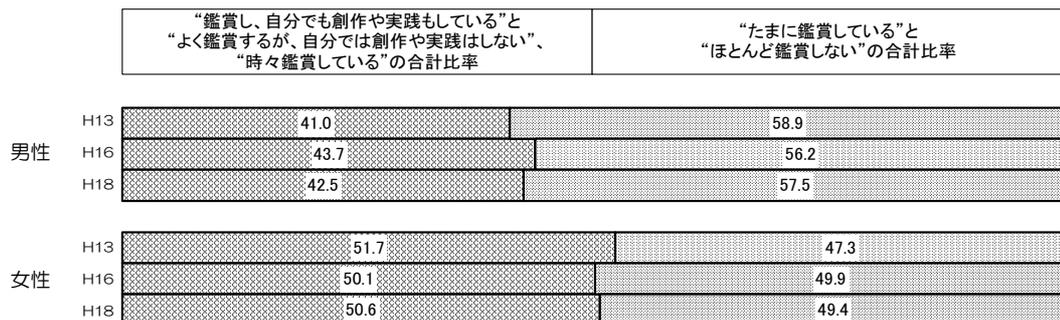
◆ 芸術文化に親しむ人はほぼ横ばいで推移

芸術文化に親しむ人の割合は、横ばい傾向で推移しており、平成19年度目標値とは3.8ポイントの開きがある。内訳としては、鑑賞、創作・実践ともに行う人はほぼ横ばい、よく鑑賞するが、創作・実践しない人はやや増加、時々鑑賞する人は僅かに減少となっている。基本的に、鑑賞中心の行動パターンは変わらない結果となっている。



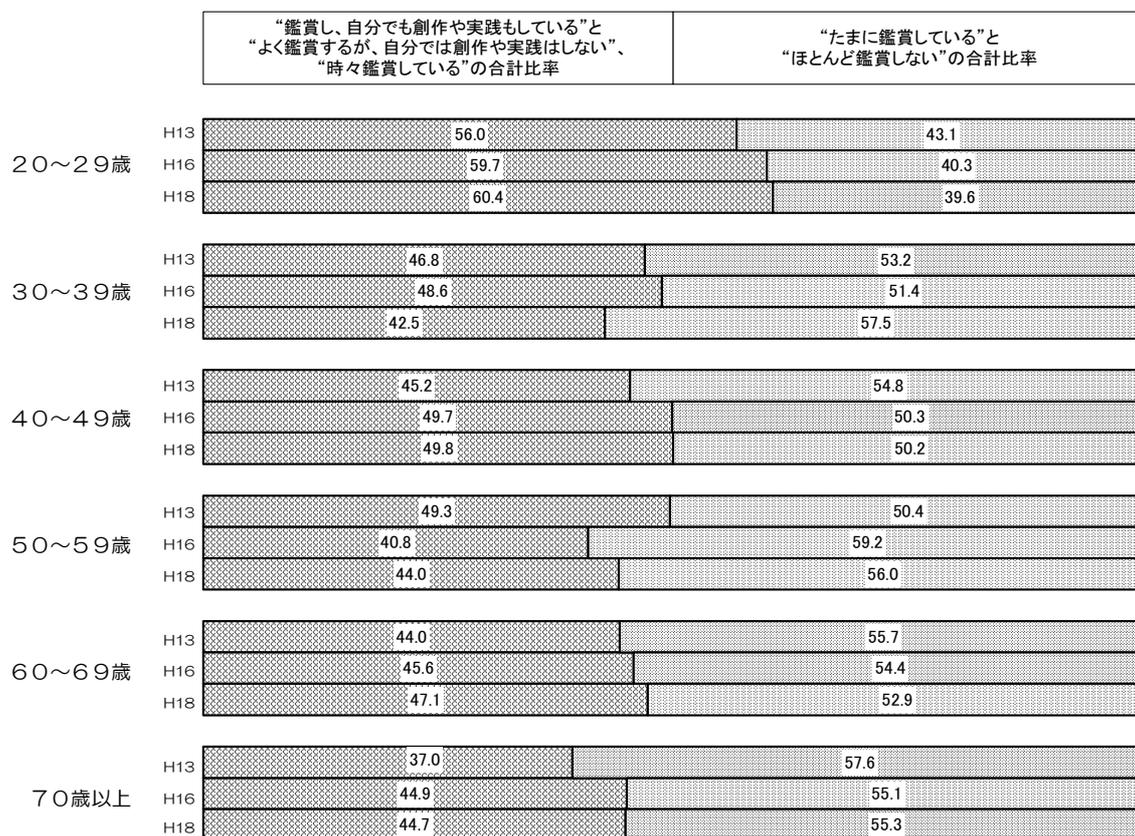
性別で見ると、女性の方が芸術文化活動に対して積極的で、“鑑賞し、自分でも創作や実践もしている”と“よく鑑賞するが、自分では創作や実践はしない”、“時々鑑賞している”を合わせた芸術活動に積極的だとする人は半数を超えている。

【性別文化・芸術活動】



年齢別にみると、“鑑賞し、自分でも創作や実践もしている”と“よく鑑賞するが、自分では創作や実践はしない”、“時々鑑賞している”を合わせた芸術活動に積極的だとする人は、20歳代の若年世代では6割以上と比較的高い割合で、それ以外の中高年齢層では50%弱で推移している。

【文化・芸術活動×年齢】



地区別でみると、“鑑賞し、自分でも創作や実践もしている”と“よく鑑賞するが、自分では創作や実践はしない”、“時々鑑賞している”を合わせた芸術活動に積極的だとする人は、小金と新松戸で半数を超えているものの、その他の地区においても、ほぼ半数弱となっている。

【地区別文化・芸術活動】

